

2017年2月10日
神田外語大学 CUP
第12回幕チャリ代表 古川 和樹

幕チャリ支援先(カンボジア)現地訪問レポート

<訪問の概要>

神田外語大学学生ボランティア団体「CUP(Create Universal Peace)」では、その主催する「幕張チャリティ・フリーマーケット(幕チャリ)」の売上金を様々な社会活動に寄付してきた。のべ12回に及ぶ開催を通じての寄付総額は1,750万円を超えるが、そのうち最も多額な寄付(約1,200万円)は「公益信託アジア・コミュニティ・トラスト(ACT)」へのもので、アジアにおける自立支援に役立てられてきた。

本レポートは、このACTによる自立支援の中心的事業地であるカンボジアを訪問し、幕チャリの寄付金がどのように活用されているのかを学生が主体となって実見した報告である。2010年のカンボジア訪問の際と同様、現地でのコーディネートにはACT事務局の全面的なご協力を得た。

1. 参加メンバー(神田外語大学 CUP)

今井 さくら(英米語学科1年)	古川 和樹(英米語学科2年)
石橋 佑太(IC学科2年)	白井 千郷(英米語学科3年)
坂内 未央(IC学科4年)	小野 里美(英米語学科4年)

2. 同行コーディネーター

アンガラ・グラディスさん
(特定非営利活動法人アジア・コミュニティ・センター21)

3. 訪問期間

2016年11月23日(水)~11月26日(日)

4. 現地訪問スケジュール

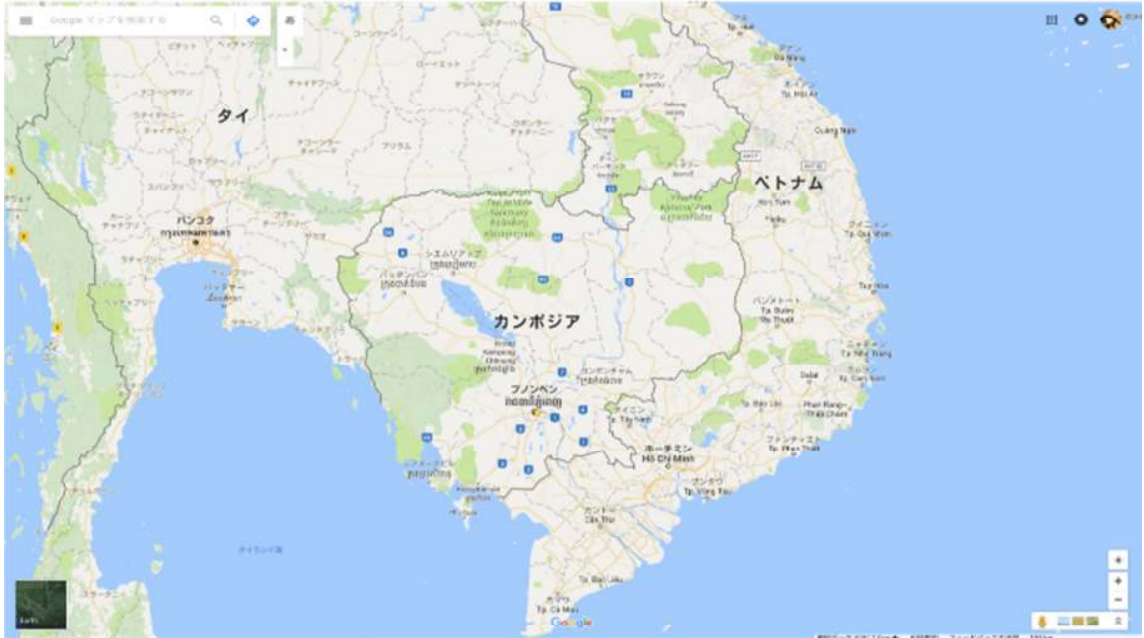
11月24日—タイニー・トゥーンズのドロップインセンター訪問→家庭訪問

11月25日—ロシアンマーケット→トゥールスレン→キリングフィールド→コンポチュナンへ移動

11月26日—Kampong Thom 州 Kampong Svay 郡 Phat Sunday コミュニティと会合、コミュニティの紹介→リーブ・アンド・ラーンの紹介→水上家庭農園の視察→コミュニティ・センターと非公式教育のクラスの視察

5. 訪問地

1. カンボジア全体



2. 首都プノンペン周辺

○内の数字は訪問の順番を表します。



3. トンレサップ湖周辺



<訪問の所感>

●11月24日午前：プノンベン特別市 Chmkarmorn 群 Chba Ampov での実施事業 “ステップアップ・プロジェクト”の見学

“ステップアップ・プロジェクト”では、ACTのパートナーである現地NGO「Tiny Toonse(タイニー・トゥーンズ)」がドロップイン・センター(リスクにさらされた子供達が立ち寄って安全に過ごしたり教育を受けられる施設)を運営し、そこでは子供達にヒップホップやダンスなどのアクティブ教育(写真①、②)や英語、クメール語、算数などのインフォーマル教育を提供していた。

到着した際には、子供達がダンスで出迎えてくれ、大音量の音楽に負けじと踊るエネルギーに満ち溢っていた。また、自分で学んだ技を披露しようとする子供たちの一生懸命な姿も、場を圧倒するものだった。

次いで、私たちから神田外語大学CUPの活動と内容とTiny Toonseを訪れた理由を説明した後、お返しとして日本の伝統的な遊びである「福笑い」(写真③)、「けん玉」(写真④)、「折り紙」(写真⑤)、「紙風船」で子供達と一緒に遊んだ。子供達は学校で英語を学んでいたが、まだ全てを理解し流暢に話せるわけではなく、会話によるコミュニケーションよりも、単語一つ



写真①



写真②

一つやジェスチャーでお互い意志疎通を図ることが多かった。しかし、逆にそれが初対面の私達と彼らの距離感を縮めてくれ、心から通じ合えたと感じることができた。また彼らのダンスや勉強に対する真剣な姿勢と無邪気な笑顔、楽しそうに遊ぶ姿が何にもまして印象的だった。

写真③



写真④



写真⑤



●11月24日午後：ドロップインセンターに通う子供の家庭訪問

ドロップインセンターで子供達と触れ合い、楽しんだあと、午後はセンターに通う2人の子供の家庭を訪問し、カンボジアでの生活についてご家族の方からお話をお聞きすることができた。2人の名前は Sok Sokha ちゃんと Sern Sarous ちゃん。その時の様子を以下にまとめる。

—①Sok Sokha ちゃんのお宅—

Sokha ちゃんの家は、中心街を少し離れた住宅街にあり、隣には何軒か他の家族と一緒に住んでいる様子であった。Sokha ちゃんの家は8人家族だが、家は6畳～8畳程の部屋の広さしかないため、就寝の際は皆と一緒に眠れるように工夫して、ソファや床で寝たりしているということであった。家は借家で、家賃と生活費を賄うだけで精一杯の厳しい状況であるという。

彼らは、知り合いや周りからの口コミで Tiney Toonse の存在を知ったと言っていた。Sokha ちゃんは、Tiney Toonse が全児童の家を巡回させている ThukThuk に乗って毎日学校へ通っているという。母親は、家族や兄弟がたくさんいると、どうしても一人一人にかかる時間が少なくなってしまう、かまってしまう機会に限られるけれど、Tiny Toonse では一人一人をきちんと見てくれるし、友達と触れ合える時間が増え、安心して通わせることができると、Sokha ちゃんの通学を高く評価していた。また、Sokha ちゃんを家事に巻き込むことなく、子供が受けるべき教育を受けさせられるため、施設の存在にはとても感謝していると語っていた。

Sokha ちゃん自身は、施設では新しい友達が出来、ダンスも覚えられるし、勉強も出来るし、通うのが本当に楽しいと笑顔で答えていた。



ACT の担当者さんの話では、一年前の Sokha ちゃんはとてもシャイで、自分に自信が持ててないように思われていたが、Tiny Toonse に通い、自分を表現する場も増え、友達も出来たことにより、とても自信満々で明るくなったように見えるという。実際、Sokha ちゃんのはっきりと自分の意見を言い、自分に自信を持っていて、ダンスもとても上手で格好良かった。やはり大勢の子供たちと触れ合える

環境にある Tiny Toonse の場は、非常に重要な存在であることに間違いないだろう。

なお、Sokha ちゃんの家族は協力的に私たちを家に招き入れてくれたが、最初に家庭訪問の話があった際には狼狽したとのことであったので、私たち外部の人間が現地の人々の生活を考える時には、彼らの思いを大切にしながら、何が彼らにとって有益かを考えていかなければならないと強く感じた。

—②Sern Sarous ちゃんのお宅—

中心街から少し離れ住宅が点々と立ち並ぶ場所に Sarous ちゃんの家はある。しかし、ごみ捨て場のようなごみが散乱している場所が隣接していたため、衛生面が心配であった。また、家は高床式になっていて、木材が多く使用されていた。しかし洪水で溜まった水がなかなか引かず床が浸水してしまっている状態であったため、こちらも衛生面と共に木材の腐敗状態等が心配であった。彼らは親戚から譲り受けた家で暮らしており、譲り受けてもらわなければそこ以外に住む場所はなく、路上で生活していた可能性もあると話していた。家庭は6人家族で、Sarous ちゃんと妹と一緒に Tiny Toonse に通っており、兄2人と父親は働いているが、現在父親は体調を崩してしまっているため、収入が厳しい状況ということであった。しかし、家族の雰囲気は明るく、お互いに仲が良さそうであった。



Sokha ちゃんと同様に、彼らも周りの人からの口コミで Tiny Toonse の存在を知ったということであった。母親は「Sarous ちゃんは以前よりもっと元気で明るくなり、家事をやらせなきゃいけないという心配もなく、友達と出会って共に遊んで学ぶ機会が持てて、とても良いと思う。子供が受け

るべき教育もきちんと受けられているため、将来は Tiny Toonse で学んだことを基に進学したり、Sarous ちゃんが進みたい道へ進めることを期待している」と話していた。また「子供が楽しんでいる顔を見られるのが、一番嬉しい」とも語っていた。Sarous ちゃん自身は、施設では皆と会えて楽しいし、好きな勉強も出来るからずっと行きたいと語っていた。

施設経営者の一人であるショートさんは、「カンボジア政府は貧困層の人々がその境遇から抜け出せないレベルで給料を定めているので、そこが不公平かつ負の連鎖をもたらす基である」と語っていた。本当に貧富の格差をなくすには、政府に働きかけなければ変わらないのかもしれないが、このように子供たちやその家族を「教育」という形で支援している Tiny Toonse の存在も不可欠で、まずは私たちは、彼らの目標、取り組みについて周りに伝えていくことから始めていかなければならないと強く感じた。そのことにより、日本の教育を見直すきっかけにもなり、カンボジアの子供たちを一人でも多く助けることが出来る機会に繋がるのではないだろうか。



●11月25日（金）午前：プノンペン市内観光 午後：コンポンチュナン州のリブ・アンド・ラーン環境教育カンボジア事業地へ移動

25日の午前中は、プノンペン市内の観光地(トゥールスレンなど)を巡ったのちに、午後からACTの支援するリブ・アンド・ラーン環境教育カンボジアが行う事業地へと向かった。事業地は東南アジア最大の湖トンレサップのおおよそ南東に位置する。プノンペン市内からミニバスで休憩も挟みながら約2時間、途中には中国が出資したとみられる工場や広い草原など、日本とは違った田舎の景色が広がっていた（写真①と②）。経由する街々では、日本政府の支援事業も見受けられた。

この日は移動のみで終わり、リブ・アンド・ラーンのスタッフであり、今回の案内人であるサムさんが薦めるレストランでカンボジア料理をいただき、近隣のホテルに宿泊した。

写真①



写真②



●11月26日（土）午前：Phat Sandayコミュニティ議会との会合→リブ・アンド・ラーンの紹介
→水上家庭菜園体験 午後：リブ・アンド・ラーン環境教育カンボジア事業地訪問

宿泊先のホテルからミニバスに乗車し、漁港からボートに乗り、コミュニティ議会へ向かった。コミュニティとは村のようなコミュニティの単位である。なんとこのコミュニティは、すべての建物が通年で水上に浮かんでいる。議会に着くと、現地の方が優しく迎え入れてくれた。

この地域では、リブ・アンド・ラーンが手を組みコミュニティ特有の課題の解決を試みている。幕チャリがどのような団体でどのような活動をしてきたかの簡単な説明をした後に、ここでの実際の課題や、リブ・アンド・ラーンが行なっている活動成果、目標などについての説明していただいた。このプロジェクトには、自立自給を目指す、機能的なコミュニティの形成など主に6つ目標があり、すべての目標の根幹にあるのは、村人による地域社会の自立的な生計向上と、教育へのアクセスが限定されている子供たちの家庭への生計支援である。

ACTは2016年から約1年間、目標達成のため補助金をリブ・アンド・ラーンに交付している。この地域の人々は、湖上生活のため収入を漁業に頼っているが、漁業収入は不安定であるため、リブ・アンド・ラーンが水上有機農園の技術を村人に教え、農作による安定的な収入を目指してきた。お金を効果的に管理し、商売をする方法をリブ・アンド・ラーンが教え、また同時に貯蓄も促すことで、より金銭的な良循環を基盤づけようとしているのだ。コミュニティの環境を良くしようという人々の志の高さには大いに感銘を受け、外部からの自立支援がテコとなって村全体へ大きなメリットが及び、それが村人一人一人の将来にも繋がることを実感した。

次いで、水上家庭菜園を実見させてもらった。まず、農園が水上に浮かんでいることに非常に驚いた。家からも少し離れており、移動には小さなボートが必要だが、土の入った発泡スチロールの箱に小穴を掘って苗を植えている。決して広いとは言えない農園であり、動き

回るのにも苦勞するが、このような小さな積み重ねが現地の人々の生活を改善し、新たな生きる糧を生み出していることが理解できた。

● 11月26日（土）午後：昼食→コミュニティー・センターと非公式教育クラスの視察（Tasoam村）

コミュニオン訪問の後には、ボートで移動し、湖上のお宅で昼食をいただいた。湖で収穫した魚や採れたてのフルーツなど、美味しい食事でもてなして頂き、水上でご飯を食べている不思議さと同時に、カンボジアの食文化や家庭の雰囲気を感じたひと時であった。また、家の中には定期的に運ばれて来るペットボトルの水の備蓄があったことから、水上生活の大変さを実感し、また屋内で電化製品が稼働しているのを見て、電気が通っていることに驚いた。日本との文化の違いと共通点の両方を発見したひと時であった。



そこから船で10数分移動すると、何やら子供達の声が響く建物へと到着した。コミュニティー・センターである。ここでは非公式教育が行われ、様々な年齢の子供達が、楽しそうに授業を受けていた。

私たちが到着した時、子供達は少し緊張しているように見えたが、だんだんと慣れてくれたようだった。そして、数人ごとでお気に入りの音楽に乗りながら、歌を披露してくれた。教室を見回すと、そこは日本の小学校と同じように、文字や数字など色々なことを覚えるためのポスターなどが貼られ、自分たちの幼少期を思い出しつつ、この教室での授業について聞いたり、子供達に質問をしたりした。



やはり子供達は学びを心から楽しんでいるようで、皆生き生きとした表情をしており、教育の素晴らしさや、教育を受けられる施設の重要性をしみじみと感じた。学生である私たちが、このような場所での教育などに直接的に役立てることは少ないかもしれないが、寄付等を通して間接的には貢献できること、様々な人々と関れることは実感できた。とりわけ、「幕チャリで産み出された寄付金」がACTと現地のNGOの協働を通じて活用され、教科書(写真①)や水の浄化装置(写真②, ③)などの形で結実している様を見て、その実感は確信となった。

写真①



写真②



写真③



●おわりに

このカンボジア訪問を通して、幕チャリからの寄付金がどのように活用されているのかを実見することができた。私たちは、幕チャリからの寄付金が実際にカンボジアの子供達に健康を届け、教育の場を生み出し、何より子供達を笑顔にしている点にとっても感銘を受けた。

また、みんなで寄付した時間や労力、物やお金が、目に見える形となって具体的に人々の役にたっていることを実見でき、幕張地域が一体となって寄付金を生み出す幕チャリというシステムが、グローバルに貢献するものであることも再確認できた。

今後も、幕チャリを通して着実な自立支援が持続できるよう、みんなで一丸となり活動していきたい。